

AI 支援型の模擬医療面接：研修医のための Bad News 伝達スキルトレーニングプラットフォームの開発

Artificial Intelligence assisted Mock Medical Interviews: Development of a Bad News Communication Skills Training Platform for Residents

岡山大学病院・院内がん登録室
助教 山本 晃

研究期間

令和6年4月1日～令和7年3月31日

研究の概要

Bad News 伝達は、重要性の割に学びの機会は極めて限定的である。申請者らは、先行研究（Yamamoto A et al. JMIR Med Educ 2024）で作成した医療面接練習用プラットフォームをベースとして、学習者が簡単に練習用の Web ページにアクセスでき、人的コストをかけずに「Bad News の適切な伝え方」をマスターするための練習プラットフォームを開発した。生成 AI が模擬患者役およびフィードバックを行う指導医役の両方の役割を担う。本研究では、Bad News の適切な伝え方や医療面接スキルの向上が求められる初期研修医を対象として、患者に寄り添った Bad News の伝え方を自由に練習できる環境を提供し、その効果を調べることを目的とし、卒後臨床研修の一助となることを目標とする。

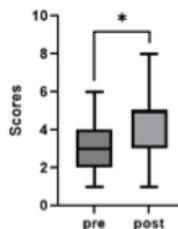
方法

研究同意の得られた岡山大学病院の卒後1～2年目の初期研修医11名（1年目5名、2年目6名、男女比7:4）を対象とした。医療面接は当院の卒後臨床研修センターの個室でPCを用いて行った。参加者は事前アンケートを記入した後、デジタルヒューマン技術を用いた音声形式の医療面接を約1時間実施し、終了後に事後アンケートを受けて研究は終了とした。アンケートは10段階式スケール式の項目と、自由記述形式で行った。

結果

事前アンケートでは、Bad News 伝達に対する自信は、医療面接全般に対する自信よりも低い傾向にあり、経験者も3割に満たなかった。医療面接に関するアンケートでは、介入後に医療面接全般に対する自信が、統計学的有意差はなかったものの改善傾向を示した。Bad News 伝達に関しては有意な改善が認められた。また、自由記述アンケートにおいては、実臨床における緊張感の軽減、練習の柔軟性、バリエーションのある応答、即時かつ構造化されたフィードバック、標準化されたトレーニング

Self-Confidence(Bad News Telling)



といった利点が示唆された。一方で、音声入力や対話ログ管理といった技術的課題が指摘された。

考察

本研究の結果から、デジタルヒューマンおよび生成 AI を活用した Bad News 伝達トレーニングは、初期研修医の医療面接スキル向上に有効である可能性が示唆された。視覚的・聴覚的にリアルなデジタルヒューマンを導入することで、研修医は実臨床に近い没入感のあるシミュレーションを経験できた。一方で、音声入力の精度や対話ログの管理、実装費用など、いくつかの技術的・運用上の課題が残されている。今後は、より軽量かつ高性能な音声認識技術の導入や、教育現場での継続的運用を見据えたコスト削減策など、実用化に向けた取り組みが必要とされる。